

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 17 号

発行日
2023.12. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○「最適(解)」と「エビデンス(証拠)」-実際は...!!

先に、かの「最適(解)」に関わって、怪しげな論考を行ったが(第15号)、今回は、それに連動していたトピック(思い?)があつたので、そのことを、改めて書いておきたい!それは、今や普通に取沙汰される「エビデンス(証拠)」ということについてである。

しかるに、ある時期、「EBPM(証拠に基づく政策立案)」ということがしきりに唱導され、大学においても、それに基づく多様なエビデンス(証拠)づくりが、それこそ堰を切つたように行われ始めたことを覚えているが(現在もそうなっている?)、今、改めて思えば、そうしたことが、真に意味があつたのかは、かなり首を傾げざるを得ない!!

と言うのも、それが、いわゆる「実証的(客観的?)」なものとして見えてはいても、それらの多く(否、ほとんど?)は、最終的な政策決定での決め手にはならなかったからである!!要は、その時の「最適(解)」が、必ずしも望む結果を生むとは限らないということである(ただ、その限りにおいては、一応は「最適(解)」とはなっていたとは言える?)!

尤も、そのような作業、スタンスは、全体的な予算のやりくりにおいては、ある意味必要不可欠な手続きとはなるので(誰かの恣意や特定の人物・勢力の独断専行を阻止できるという?)、そのこと自体は進歩であり、決して否定されるべきものではないのかもしれない!!

とは言え、それは、事実上は?、政策決定者(端的には予算をつける側)の、後付け的な(相手に文句を言わせないため?)論拠にはなる!!ただし、それだけで終わるなら、その努力・熱意(期待)は、空しいものともなる!!非情:

○どう行く? PTA?そして、他の団体も?

別途でも述べたが(新・教育協働への道17)、その存在自体は、絶対になくならないと思われているPTAで、「ついにここまで来たか!!」と思わせる事件?があつた(ネット記事)!それは、ある県の高校教師が、それまで払っていた会費(6年分)の返還を求めて訴訟を起こしたというものであるが、その教師は、原則は任意加入のはずなのに、その意思確認もなく、半ば強制的に会費納入を強いられてきたのは違法で、校長と元PTA会長に、払つた分の返還を求めるということであつた。

しかるに、このPTAについては、もうかなり以前からそのあり方が問題視されてきたわけであるが(特に役員選び。かの「上納金」問題も?)、それについては、まだまだみなが納得できるような状態とはなっていない!!そういう中で、しかも教員の方からの異議申し立てということもあり、この訴訟の顛末が注目されるところであるが、一方では、ある大きな問題提起ともなる!!

すなわち、これまでの、学校を含む地域社会には、こうした、言わば加入が当たり前という形で存在してきた組織・団体が多々あるわけであるが(自治会、老人会、婦人会、青年会、子ども会等)、それらは徐々に変容し、そのほとんどは、その存続さえもが危ぶまれる状態となっているわけである(その加入率が低位となっている!)!

本来そういう運命?のものと言つこともできるが、今、新たに「地域の絆づくり」が叫ばれている!この訴訟が、その動きとどう関わっていくのか?その決着には、こうした文脈が是非加わって欲しいものである!

○「偉大な凡庸」!「後継者問題」の究極の課題?!

今回も、あるネット記事からの借用であるが、面白い箴言(?)に出くわした!「偉大な凡庸」という言い方である!現在放送中のNHK大河ドラマ「どうする?家康」での、ある回の一コマであるが、ある重鎮家臣(本多正信)が、二代目将軍秀忠に放つたものである!かつて私は、学生達(もちろん一部の!)に、「かっこいいサラブレッドより、泥臭い駄馬を目指せ!」というようなことを明(迷?)言していたことを書いたが、この度は、こちらの方が、「より説得力のある」言い回しなのではないか?そう思ったりもしたということである!

「才があるからこそ、秀康さま(長子)を跡取りにせんのでござる!」その点、あなたさまは全てが人並み!」「人並みの者が受け継いでいけるお家こそ、長続き致します。いうなれば、偉大なる凡庸といったところですな!」関ヶ原でも恨みを買っておりません!な、間に合わなかったおかげ!」と、將軍職に弱音を吐く?秀忠に、とくと説き明かす。秀忠は、「確かにそうじゃ。かえって良かったかもしれんな」と笑うのだった...

実際に、そういうやり取りがあつたのかどうかは分からないが(史実としては疑わしい?)、その言わんとすることが、不思議と共感できるような気がするのである!要は、そういうことであれば、多くの人達(ここでは家臣達!)が、ある意味心配で、「あなた様を多種多様に助けてくれる」(時には吉言を呈してでも?)!そういうことであつたように思うのである!まあ、当人は、いろいろと大変ではあるが(どこかの宰相職のように?)!

本ドラマの作者(演出家)の人生(人間)観かもしれないが、現実には、確かにそうである?と、改めて感じ入るわけであるが、危険な独裁者は論外であるが、孤高の切れ者・実力者、その一代で終わる者(信長/秀吉)ではダメだということでもあろう!!

ということ、これは、ある意味未来永劫?続く、リーダー論議の宿命であり、それは、まさしく「後継者問題」の究極の課題でもある!しかも、これは、何も国政レベルだけの話ではなく、むしろ、どこにでも伏在している問題でもある!政治とは、そして後継者づくりとは、本当に難しいものである!!

○こんな人生もあるのか？何ということだ？！

本当に、驚いた！そして、信じられない！こういうことで、ほぼその人の人生が埋まってしまおう？！そこで、その人の人生時計が止まってしまっている？！そういうこととはあり得ない？その人とは、かつての宮崎県の高校球児である！ネット記事には、次のように書かれている！

「61年前の暑い夏、戦後アメリカ統治下の時代、沖縄高校の快拳に人々は沸いた。一方、敗れた宮崎大淀高校のエース三浦健逸の人生は、大きく変わった。世間から『宮崎の恥』と呼ばれ、やがて野球の夢を諦めた。今年、三浦は80歳を目前にして、かつてのライバルたちと再会する旅に出た。沖縄ナインにとつてあの試合の意味とは何なのか。そして、共に投げ合ったピッチャー安仁屋宗八に、長年言えなかった言葉を伝える。」

とまあ、これだけでは、彼の人生が、具体的に何ほどのようなものであったのかは分からないであろうが、そこにある人生ドラマは、当時の「本土と沖縄の関係」（思い）がいみじくも投影されており、私には、二重の意味で（元高校球児と県外出身沖縄在住者ということ）、胸を打たれるものがあつた（ラスト・イニング 宮崎 vs 沖縄 初回放送日！ 2023年7月31日「ドキュメント Zone」↓高校野球史の伝説が今よみがえる。1962年、沖縄が実力で初の甲子園を決めた一戦。その陰で敗れた宮崎のエースが抱えた葛藤、時を越え再会する球児たち。語り…谷原章介）！

ちなみに、「番組のねらい…『見たいテレビがない』という世代に向けて」、『こんなテレビ見たことがない！』といつてもらうための20分間。これまでの演出・文法・テーマから自由な若手制作者たちが、新しいテレビの形を模索します。」ともある。グッドである！※なお、当時の、夏の甲子園大会には、宮崎と沖縄の場合、そのどちらかの勝利高が代表となることになっていた！誠に「狭き門」であつたわけである！そして、それまでは、すべて宮崎県の代表が、甲子園に行っていたわけである。

○また、こんな人もいる！ユーチューブの思わぬ福音！

他に書きたいテーマがなかったわけではないが、いつものように、ネット記事を見ていたら、ちよつと気になったものがあつたので、ここで急遽取り上げることにした！

文頭には、「由が湧く凶悪 2年半傳はした爪：40代引きこもり男性の苦しみ ずっと自分なりに、もがき続けてきました」とあり、「貧困などで困窮しているのに、男性だから」と手を差しのべてもらえない男性が「弱者男性」と呼ばれている。先行き不安な時代が彼らを社会の隅に追いやったのか？彼らが抱える「生きづらさ」の正体を突き止める。(SPA)とある！詳しくは書けないが、現在は、何故か？ユーチューバーとして、注目されているらしい！

しかるに、「YouTube は収益化できましたが、とても生活できる稼ぎには程遠い。この7年間で人並みの生活はムリだと諦めざるを得なくなりました。せめてこれからは、人ならざる者」として、「社会に敗れた男の姿」を記録に残して、誰かの今後の生き方のヒントになればいいですね」と、本人は語っているという！これも一つの人生ドラマ！！

- ・短歌に託して今年も少なし！様々な人生見聞！！
- ・何のための エビデンス（証拠）？
ただ捨て去られては 悔しさのみ！！
- ・PTA 良かれと思われ 生まれしも
世が移ろえば 厄介者！！
- ・偉大なる凡庸？ 言い得て妙なり！
ただし当人は それどころではなく？！
- ・こんな人も いるのかと
同じ球児として 複雑 否、恥ずかしい？
- ・40代引きこもり！ 弱者男性？
それを逆手に 生きれば それもよし！

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕 ⑦

○改めて、倭国大乱と「大幡主命」／「開花天皇」の関わりは？！さて、改めて、こうしてみると、3世紀後半に、「崇神天皇」を中心にして、近畿・大和に、新しい勢力・王権が出来ることになるわけであるが、三輪山麓の橿原祭政郡の出現、磯城地方の隆盛、一方の北部九州には、その時期においても、倭国／邪馬台国連日あつた（残っていた！266年の「西」晋への遣使は、その倭国／邪馬台国連日あつたことは確か！「百舌」が女を産んでいる！）！そして、その一世代前は、「卑弥呼」はもちろん

崇神の父親の「開花天皇」の時代ということにもなるわけである！！であれば、それらの時代全体の史実解明の視点は、その前提としての、「倭国」を中心としていた、まさに「倭国」の解体・参集、それが、かの「倭国大乱」と呼ばれるものであつたが、一方では、近畿・大和における新たな勢力の出来・結集、他方では、残された？北部九州の、その後の新たな展開を生んだということである！！おそらくそれらが、孝元「開花」崇神→垂仁「景行」成務、さらには仲哀・神功皇后・武内宿禰、そして応神→仁徳等に示される一連の状況であつたということである！！

要は、それらは、連続的、したがって同時進行的に進んでいたものということであるが、別言すれば、関わりのある同じ部族・勢力によって進められたのではないかということである？例えば、「和珥族」、「鴨族」、「物部族」(倉部氏や海部氏を含む)とかである！！そしてそこに、神功皇后・武内宿禰(龍彦)、さらには応神・仁徳等の新しい勢力(外系系か?)が入り込んできた！！そういう中で、北部九州が二つに割れ、その中の一方の部族・勢力が近畿・大和へ移動し(吉備と出雲を抱き込んで)、他方では、新たな勢力の参入による「新倭国？」の誕生という形となつたということである！！

ただし、その後には、近畿・大和への集結に関わつていた一部の勢力が、再び関わつていないのか？！それが、神武の、大和での長子とされる「神八井耳命」の後裔である「多氏」である(彼らは、天(肥)君「阿蘇彦」天(公)君等となつていった)！！こうなると、そこには、新たな史実の解明が必要となつてくる！！そして、その大きなリングが、「大幡主命」と「開花天皇」の関係と睨んでいるのであるが…！！(つづく) (堂本)〔編集後記〕改めて、いろんな人生ドラマがあるものである！古代においても然りであろう！！しかし、後者はまだ、その舞台装置さえもが見えてこない！！とにかく真実を知りたい！！(井上)堂本